

● 東 北

工 藤 一 郎

東日本大震災から4年目となった。発災直後に任意団体として立ち上げられた「音楽の力による復興センター・東北」（以下、復興センター）は2014年4月に公益財団法人化されて活動を一層充実させている。当初からその中心は「復興コンサート」。仙台フィルメンバーを柱に他のプロオケメンバー、グループ、個人の演奏家などの出演も加わり、2014年末現在その回数は通算約450回、鑑賞者数も延べ約10万人に迫っている。他には「ウィーンフィル&サントリー音楽復興基金」が2012年から5年計画で行っている、ウィーン・フィルメンバーによる被災地支援活動への協力。この年も震災慰霊碑前での献奏に始まり、子供たちのためのコンサートや仙台ジュニアオーケストラのためのワークショップなどを行った。また、後述する「仙台クラシックフェスティバル」では主催者陣の一角を占めて「街なかコンサート」などを担当。被災地の音楽団体数組を出演させただけでなく、他の公演への招待も行った。前年、石巻地域で組織された実行委員会に日本作曲家協議会と日本オーケストラ連盟が協力し、全体の調整・仲介役を復興センターが担って行われた“心のランドマーク”計画（被災地で統廃合される小中学校の校歌をオーケストラ演奏でCDに残すプロジェクト）は、完成したCDが石巻市に贈呈されてひとまず終了したが、今後あり得る要望に備えてその仕組みは温存されている。

2012年に読響創立50周年記念事業の一環として福島県いわき市からスタートした「きぼうの音楽会」シリーズは、前年の宮城県名取市を経て3回目は初回の地いわき市。同出身の小林研一郎の指揮、その令嬢小林亜矢乃のピアノ、コンマス日下紗矢子のヴァイオリンで情熱と祈りに満ちた演奏を繰り広げた。最後はマエストロ自ら「一貫して刻まれるリズムは再生への鼓動」と説いたラヴェル《ボレロ》の大熱演。このシリーズを締めくくるのに相応しい、まさに“きぼうの”音楽会となった（3月3日、アリオス大ホール）。

同じく3回目を迎えたのが、「こどもの音楽再生基金」の活動の一環として行われてきたイベント「School Music Revival Live (SMR)」。全体としては、被災地の学校の楽器を再生することによって音楽する喜びを取り戻してもらおうという取り組み。過去2回とも、基金の発起人の一人でありこのイベントのゼネラル・プロデューサーでもある坂本龍一が、参加者たちと触れ合うとともに自作を共演したのだが、今回は坂本が療養中のためピアニストの清水和音と山下洋輔が代役を務めた。前年に開始された「ルツェルンフェスティバル・アークノヴァ2013 in 松島」でのグスターボ・ドゥダメルによるワークショップに因應べく結成された「東北ユースオーケストラ」と清水との共演に始まり、被災3県（岩手・宮城・福島）の中学・高校の音楽系クラブの約420人が個性ある演奏を繰り広げた。山下は最後に全参加者の合同演奏と共演した（8月3日、東京エレクトロンホール宮城）。このユースオーケストラの監督は坂本である。SMRは今回で終了するが、その精神を受け継いだこのオーケストラのためにも彼の早期回復を祈ってやまない。なお、前記「ルツェルン…2013 in松島」の第2回は「…

2014 in仙台」として行われた（11月1～9日）。

2006年のスタート以来“せんくら”の愛称で親しまれている「仙台クラシックフェスティバル」（主催＝仙台市、仙台市市民文化事業団ほか）が9回目を迎えた。2011年の第6回から掲げられているメインテーマ「音楽とともに前へ 仙台」のもと、市内外から前年を上回る延べ33,200人のファンを集めて盛況だった（10月3～5日）。

一方、山形では3回目（通算26回目）となったのが「アフィニス夏の音楽祭」（主催＝アフィニス文化財団）。主会場を前回の蔵王温泉から山形市街地に移して一般市民が参加しやすくし、プレ企画、セミナー、ワークショップ、関連コンサートなどに多くの参加者を集めて盛況だった（8月17～24日）。

上記2つのイベントでホスト・オーケストラ役を果たしたのが仙台フィルと山響。互いの個性を尊重した上での切磋琢磨に、このところ優秀な奏者の入団が相次いでいる事も手伝って、現在、両オケともに過去最高の演奏レベルに達している。

その象徴とも言えるのが仙台フィル第284回定期（7月、指揮：尾高忠明）と山響第239回定期（8月、指揮：山響首席客演指揮者・鈴木秀美）で演奏されたシューベルト《交響曲第8番「グレート」》。2つは全く異なる（正反対と言ってもいい）行き方をとりながら、それぞれの特性を徹底的に生かした破格の名演。このようなハイレベルの演奏を居ながらにして聴き比べることのできる幸せを改めて実感させられた。

この2つのオーケストラが、2012年のマラー《交響曲第2番「復活」》（指揮：山響音楽監督・飯森範親）に続き、レスピーギ《ローマ3部作（噴水・祭り・松）》を仙台と山形で合同演奏した。今回の指揮は仙台フィル首席客演指揮者・小泉和裕。震災での経験を踏まえて、次への新たな可能性を追求しようとする意欲が表れた企画。小泉の練達の棒はそれを全メンバーに浸透させ、このスペクタクル的な音楽に深い精神性をも注入した（7月26日、東京エレクトロンホール宮城。同27日、山形市民会館）。

その両オケとも、定期演奏会活動とは別に独自のシリーズ物を並列させている。

うち、仙台フィルが行っているのは名曲コンサートの傾向を持たせた「オーケストラ・スタンダード」。そのVol.11で常任指揮者パスカール・ヴェロが振ったベルリオーズ《幻想交響曲》は、彼が作曲者の精神状態に完全に入り込んでしまったのが分かる、炎上するような演奏。このような音響世界を指揮者と一体となって描き切った仙台フィルの強固な実力の証明ともなった（12月3日、日立システムズホール仙台）。

山響は8年がかりの「アマデウスへの旅」が最終年に入った。その過程で築かれた諸々の蓄積はこのオケの大きな財産となっている。飯森が指揮し、「山響アマデウススコア」（音楽監督・佐々木正利）との協働で大成功となったオルフ《カルミナ・ブラーナ》とベートーヴェン《第九》の連続上演（12月27・28日、山形テルサ）も、それがあってこそ。

支倉常長の悲劇を描いた三善晃作曲の《オペラ「遠い帆」》は、これまでも再三上演されているが、この年14年ぶりに東京公演が行われた（8月23・24日、新国立劇場中劇場。総監督：宮田慶子、指揮：佐藤正浩、管弦楽：仙台フィル、支倉六右衛門常長：小森輝彦、合唱：オペラ「遠い帆」合唱団、ほか）。両日ともほぼ満席の盛況だった。

室内楽では、仙台フィルチェロ首席・三宅進と同コンマス・西本幸弘が、それぞれにパトナホールを会場にして開始した新シリーズが盛況なのが明るい希望を抱かせる。